



今、私が伝えたいこと ～子ども時代の出会いから～

株式会社 ユニゾーン
代表取締役会長 梅田ひろ美

巻頭言の執筆にあたり、私のようなものが先生方皆様のご覧になる館報に執筆させていただくことは大変恐縮でございますが、ご縁をいただきまして、書かせていただきます。

学生時代の思い出をいくつか申し上げます。

転校の経験は人生に一度、小学校1年生の夏休みです。立山中央小学校から富山市柳町小学校に転校をしました。体が小さかったこともあり、転校し新しい学校になじめるかどうか、とても怖かった記憶があります。恐る恐る校門をくぐり、しかしその時暖かく迎え入れてくれたそのお友達とは今でも良い関係を築いています。

先生方には、今も存分に対応されておられるかとは思いますが、転校生へのケアを十二分になさってください。傍から見て大丈夫そうに見えても、小さな心は今にもつぶれそうかもしれません。先生や同級生の一言が、転校生にとってどんなに大きいものとなるか。新たな風を運んでくるその子供は、クラスの絆を深め

るチャンスとなるでしょう。

私は今、古希を過ぎて数年たちます。県内の高校を卒業し東京の短大に進学いたしました。50年以上前のことですので、その頃、東京の短大に進む女子生徒はそこまで多くはなかったと記憶しています。富山での生活との違い、何も知らない田舎娘でしたので見るもの聞くもの全てが新鮮で刺激の連続でした。

四年制大学の学生さんたちの中には、学生運動で休校の方もおられ、誘惑に弱い私はその学生さんたちと学校をエスケープしていました。学校の座学だけではなく、社会とのつながりを得た初めての経験でした。

富山をはじめ、地方出身の学生は都会に進学すると我々の想像以上に「はじめて」しまう嫌いがあるかと思います。しかし、最近は新型コロナウイルスの感染拡大により大学ではリモートでの授業が多いと聞いています。やはり、学生時代の醍醐味と言えは人と人とのつながり、多様性との出会いかと思います。今の状況を、とても憂慮しています。

先生方には、卒業しても学生たちを気にかけてあげてください。学生からの連絡は、もしかしたら必死の訴えかもしれません。

小学校から短大の先生方は、このような型にはまらない私のことを優しく、時に厳しく接してくださいました。卒業してから自分のことを覚えていてくださるのは大変嬉しいことです。慈愛に満ちた言葉は、一生心に響くものであるなどしみじみと思い出されます。

さて、私はユニゾーンに入社し早いもので30年以上が経ち、その中で社長を約15年務めました。在任中は、リーマンショックの影響も大きく、会社経営の大変さを経験しました。私自身、父から受け継いだ会社ですので創業者である父のことを触れさせていただきます。

父は田舎の五男坊、丁稚奉公から出征・シベリアに行き、私たちが想像も出来ない経験をしております。不二越さんの研究所で勉強させていただき、経験を積んで独立をしました。創業者の苦勞を傍で見ているので、私は絶対にめっき屋を継がない、継ぎたくないと心にずっと思ってきました。お友達の家のように、お父さんが早く帰ってきて、土日に一緒に過ごしているのにすごく憧れました。

でも、運命は変えられても宿命は変えられない。なんとなく私は継ぐことを強

いられてしまった形ではありましたが、「女だから」とか言われることのないよう、精一杯努力してきたつもりです。

企業というものは生き物であって、その生き物を大事に育むというそういう気持ちでこれまで経営をしてきました。創業から今まで、小さな会社から一つずつ、一步一步やってきて、父から受けたバトンを息子に渡し、経営からは一線を引いております。

現在、進学で富山を離れると県内に戻ってくる学生は少なく、Uターン就職のPRに県も躍起になっていると聞きます。我々経営者としては、魅力的な企業、就職先を1か所でも増やすことが責務かと考えています。

最近は少子化の影響もあり、社会全体で地域の子供を育て、慈愛を込めて叱るということは無くなってきているかと感じます。しかし、いつの時代も人は宝です。ものづくりも人づくりも社会の永遠のテーマであり、どのような環境でも生き抜く力をつけるため、尽力していただいている先生方には頭の下がる思いです。

コロナ禍が早く収まり、マスクを外して手を取り合いながら、気兼ねなく友達と遊べる日が一日も早く戻ることを願ってやみません。一人ひとりが輝ける世の中を、皆でつくっていきましょう。